

新しい教科書、どう使う？

— 高学年編 —



関西学院初等部
野村 真一 先生
Shinichi Nomura

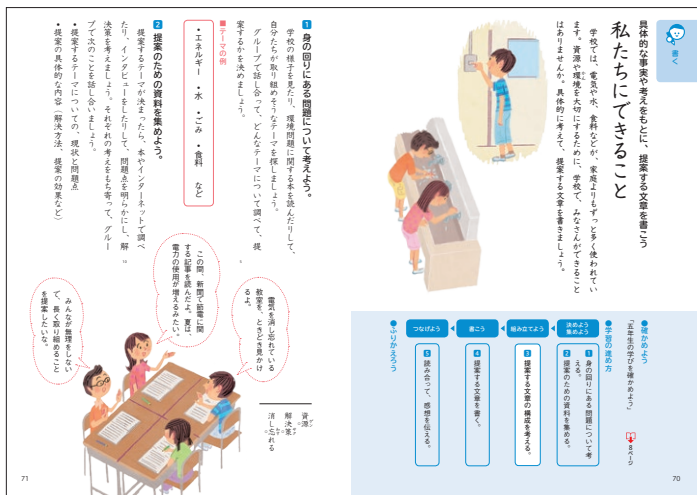
— 五年生には、説明的文章「言葉の意味が分かること」が新しく掲載されました。

旧版の「生き物は円柱形」がきれいな双括型をしていたので、新しい教材はどうなるのかなと思っていたのですが、「言葉の意味が分かること」（五年48ページ）も、とてもわかりやすい双括型ですね。題材は違っても、まったく同じ構造で書かれているので、旧版と新版との比較もおもしろいと思います。

もちろん、プレ教材「見立てる」の構成とまぶったり同じです。高学年になると、一学期説明文の二教材一単元構成にも慣れてくるので、「見立てる」を読んだ子どもたちは、「何が一緒になんだろう」という目で「言葉の意味が分かること」を読むと思います。まったく同じ構造であることを、子どもたち自身で見つけられるかもしれません。

— 「情報」の系列も新設されました。

六年の「情報と情報をつなげて伝えるとき」（六年68ページ）は、小さな単元なので、さらっと済ませてしまいがちですが、かなり歯ごたえがあります。特に1と2の文章の共通点を見つける部分は、書かせる前に、授業で話し合ってからキーワードを抜き出し、足場を作ってから取り組みたいと思います。



6年p70-75「私たちにできること」

— 学期らしく、構成を捉えやすい文章だということですね。

構成を捉えることが、この単元のねらいである要旨を捉えることにつながります。僕はよく、具体的事例を下に下げて文章構成図を書くのですが（図1参照）、要旨要約をするときには、まず、より抽象的な筆者の主張だけを取り出すことを指導します。双括型の場合は、冒頭と最後をミックスして要旨をまとめる。具体的事例は筆者の主張を支えるものなので、要旨を捉えるときは切ってもいい。ただ、本当にももしろいのは具体的事例なので、断腸の思いで削る。その後、字数に合わせて拾いにいくように指導します。

学習ページでは一五〇字以内で要旨を書いていますが、まずはどの子もブレにくい一〇〇字で書き、できた子は一五〇字でステップを踏

— その後に続く「私たちにできること」（六年70ページ）は、いかがでしたか。

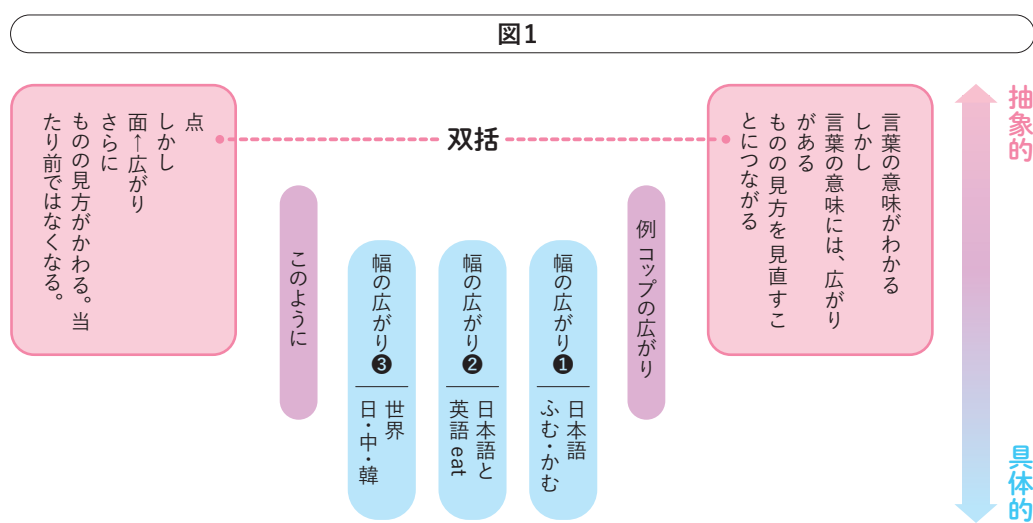
骨のある単元なので、下準備が大切ですね。まず、現状と問題点について、しっかり扱う。感覚だけでなく、学校の水道代や光熱費を、家庭と比べたり、社会科での経験を思い出したりして切実感を出したいところです。他教科等とコラボすることが大切な単元だと思います。

子どもたちが話し合っている場面の吹き出し（73ページ）は、大事なポイントを網羅しています。特に、「提案の内容が問題点をふまえているか」という点が提案の肝です。ここをしつかり書けると、おもしろくなると思います。僕なら、作例の解説をもとに、「きつかけとなった経緯」「現状や問題点」をひとまとまり、「提案すること」「提案理由」「具体的な内容」をひとまとまりにして扱い、「提案による効果」に、より重点をかけたと思います。

— 他に印象的な単元はありましたか。

「大切な人と深くつながるために」（六年193ページ）は印象深いですね。鴻上尚史さんの「コミュニケーション力って、うまくいかないとき

みたい。一学期なので要旨が書ける子を増やして、自信をもたせてあげたいと思います。



6年p193-195「大切な人と深くつながるために」

に発揮するものなんだよ」というメッセージは、感じ入りました。自分自身が目指したいと思っているど真ん中を書いてくれている。さらに、動画資料で解説もしてくれている。六年生の後半から、池上彰さんや鴻上尚史さんの文章、最後に中村桂子さんの「今、あなたに考えてほしいこと」（六年240ページ）がある。この卒業に向けての流れは、感動的ですらありますね。国語は、最終的には人と人とのつながりあうためのツールですので、六年生の最後は、文章の中心について存分に語り合いたいです。きつと編集部もそれを意図して教科書を構成されたと思うので、教師としても、この意図を汲んで授業をしたいと思います。

— ありがとうございます。